吸血鬼に憑依しちゃった！！

ロリは正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼に憑依しちゃった！！

【Ｎコード】
Ｎ４９５９Ｚ

【作者名】
ロリは正義

【あらすじ】
ごく普通（？）の高校生　紅月狂　はなんの変化も無い、いつも通りの生活を送っていた。

ある日、友人の家に遊びに来ていた時

「コンビニ行かね？」

と半ば強引に連れてかれる。
玄関を開けると何故か大きな穴ができていて、その穴に何故か友人に突き落とされてしまう。

一体狂はどうなってしまうのか！？

（この作品はそこまでシリアスなものではありません）

※この小説は小説作品初心者の、作者の練習作品です。

そのため無理矢理な展開、文がおかしいなどのことがあります。
上記のものが嫌な方、ＴＳ物が苦手、反ご都合主義などの方はブラウザバックをどうぞ。

それでもよければ読んでみてください。

いちわ！（前書き）

毎日更新をめざします

いちわ！

ー主人公視点ー

僕の名前は紅月狂（あかつききょう）　１６歳
どこにでもいる普通の男子高校生（かなり重要）。
特徴を挙げるなら動物に以上に好かれること。

身長が小学生ぐらいしかないこと・・・。
そして、よく女の子に間違われること・・・。

あまりこのことには触れたくないので、詳しくは語らないことにする（Ｔ　・　Ｔ）

そんな僕は、今日もなんの楽しみも無く、普段通り学校へ通い、その後友人の家に遊びに来ていた。

＞友人宅＜

「うわ！！もう残機０だよ！ま、待って！あああぁぁぁぁ・・・もう終ったｏｒｚ」

「ＳＴＧ下手すぎｗクソワロタｗｗ」

今僕のことを馬鹿にしているこいつは親友の氷野冬樹（ひょうの ふゆき）
少し・・・だいぶバカなのが玉に瑕だけど、いつも困ってる時には助けてくれるとてもいい友達だ。
そしてこいつには隠している能力がある。
僕も一度しか見たことがないが、これもまた後で語ることにする。

さて、今やっていたのは【東方ｐｒｏｊｅｃｔ】というＳＴＧ。
数多くの球による華麗な弾幕が売りのゲームらしい。

ぼくはその東方ｐｒｏｊｅｃｔの［紅魔郷］というものをやっていたのだが、下手すぎるせいかルーミアというボスで詰んでいた。

「いいさ、所詮ゲームだもの」

「おいおいwそんな言い訳見苦しいだけだぞ？w」

うるさい

「とにかく僕は、この手のゲームが苦手のようだから仕方ないよ」

「まっ、それで納得してやろうwそれより近所のコンビニまでジュース買いに行かね？」

慰めるかのように僕の肩を軽く叩きながら、冬樹はそう言ってきた。

「なんかむかつく言い方だな～、でも確かに喉は乾いてるし、いいよ」

肩の手を払いながら、賛同の返事をする。

「よし、そうとなりゃ早速行こう！（グイッ」

「ちょっ、ちょっと！いきなり引っ張るのｈ「いいからいくぞ！」
おーい！」

基本マイペースなこいつは僕の言葉を無視し、手をグイグイ引っ張ってくる。

「わ、わかったから落ち着いて！」

なんとか落ち着かせようとするも、まったく耳を貸さない冬樹。そのまま玄関まで引っ張られると

「ほらほら、早く靴を履いて履いて！」

なんだか少し焦っている様子で、汗を首筋に落としながら、背中を押し早く靴を履くよういってきた。

「（なにかあるのか？まあこいつはいつもこんな調子か）わかったよ・・・ほい、用意できたよ」

よくあることなので、気にしない事にしてドアを開ける。

ガチャッ

「・・・はっ？」

開けてみると、そこにあったはずの道路が無く、底が見えない、大きな穴が出来ていた。

「な、なにこれ・・・ねぇ冬樹、見てよこれ」

この穴を冬樹にも見て欲しかったので、後ろに振り向きながらそう言うと

ドンッ！！

「へぁ？」

突如襲う浮遊感、理由は冬樹の姿を見てすぐに分かった。

両腕を前にまっすぐに伸ばした状態。それは、だれかを強く押した後のような姿だった。

という事は

「なんで突き落とすんだあぁぁぁぁ！！！」

冬樹が僕を謎の穴につきおとしたということなど、簡単に分かる。だがそれも後の祭り、抵抗虚しく僕は落ちていく。

「・・・・！・・・・・・・・・・・・！」

なにか冬樹が言っているが、なにを言っているのか、聞き取ることは出来なかった。

「ウッ！！」

突如降ってきたなにかが鳩尾に入り、なにも考えることもできずにそのまま意識を刈り取られた。

―氷野視点―

よう！みんな大好き氷野だぜ！

いや～予定時刻が迫ってて、狂には何の説明もせずに突き落としちまったぜ☆

「わりーな！美女に頼まれたら断れなかったんだ！」

そう一言伝え、目の前に野球ボールほどの氷の球を作り、狂が落ちていった角度にそれを力の限り投げ込んだ。

「ウッ！！」

見事当たったのか短い悲鳴が聞こえてきた。

友達としては心苦しいが美女の願いだ。反省はしているが、後悔はしてない（キリッ

さて、いいかげん狂を送ったことを伝えないとな。そうしろって言われたし。

そう考え、俺は自分ちの、ある部屋の前にきた。

コンコン

ガチャッ

「私は神だ」

スパッツに上半身裸というなんとも気持ち悪いジジィが、羽織っていた黒いマントを取りながら出てきた。

※前回は、冬樹のいう美女でした。

ちくしょう！あのお姉さんがまたくると思っていたのに！！」

「おい、本音がでとるぞ。まぁいい、一応自己紹介をしよう。さっきも言ったが私は人間で言う神だ。」

「私も神だ」

「おお、お前もか」

「「暇を持て余した、神々のあーそーび」」

やべーwただの変態かと思ったけど以外にノリいい奴だww

おっと、それより狂のことを言わないとな。

「お前が俺と同類ということはよく分かったw・・・それより狂を女神に言われた通り穴に落としたが、一体どうなったんだ？」

肩を組みながら、そう聞くと、

「うむ、言われた通りにしっかりやってくれた様だな。なに、心配することは無い。奴は元の所に戻っただけだ。」

ハァ？（´Д`）

「お、おい！どうゆうことだよ！話が違うぞ！！」

昨日伝えてきた（俺にとっての）女神はたしか・・・・・・・・・・・・やべぇwずっと（俺にとっての）女神のこと見てて、穴に落とすことしか聞いてなかったww

「なんだって？じゃあ、あ奴はちゃんと話してなかったのか？そんな事は無い筈だが・・・まぁいい、昨日言った通りお前も＞向こうの世界＜に行ってもらうからな。ちなみに拒否権は無い。」

少し悩んでいた様子の同類は、いきなり俺に向かってビシッ！と効果音がつきそうな勢いで、思いっきり俺を指差しそう言ってきた。

「どゆこと？」

そう言った瞬間、足元に穴が開いた。

「どゆことおおぉぉぉぉ・・・・・・」

まさかの俺まで落ちるとは・・・

そう考えていると俺の体ぐらいの大きさの岩が落ちてきた。

えっ？

「ちょwおまw俺は野球ボールほどの大きさの奴しか投げてねーよwwい、いや、マジでそれは危ｎ（ドゴッ」

氷野がログアウトしました。

いちわ！（後書き）

無理矢理すぎた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4959z/

吸血鬼に憑依しちゃった！！

2011年12月16日23時49分発行